

特別企画 高校生の基礎学力定着のための研究のポイントは？

の学び直しを含めた「教材」及びその活用システムを開発する。また、「教材」活用システムモデルを県内で共有し、各学校の実態に応じて活用できる体制を構築することで、県立高校全体の基礎学力向上を目指すとともに、「教材」を活用したCBT実施も行う。さらには、試行調査を通して、技術的な課題や問題点等を分析し、模試等による評価も加えて「教材」活用システムの有効性を確認するとともに、必修科目「国語総合」「数学Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅰ」の学力定着度の変化を検証する。各学校の実態に応じて、基礎学力の定着を図るためのカリキュラム・マネジメントを確立しやすいモデルを提示する。

「ラーニング・カルテ」を作成

山梨県立市川高校、同富士北稜高校では、①「ラーニング・カルテ」によるオンデマンド・ラーニングシステム（仮称）の開発（ICT機器によって生徒の学習履歴やテスト結果をデータベース化したラーニング・カルテに基づき、個々の生徒の学力に応じた学習教材を提供するシステム

を開発しPDCASサイクルを確立）  
②授業の予習・復習に資する効果的なICT活用方法を研究③主体的・対話的で深い学びの視点に基づいたICT機器を活用した授業実践に関する研究④生徒の基礎学力定着をねらいとした教材・テストの開発⑤試行調査を実施し、結果の活用方法を研究などを進める。

基礎学力の定着状況の測定方法を明確化する研究を進めるのは、奈良県立榛生昇陽高校。これまでの定期考査で使用していた問題の分析をとおして、基礎学力を測定するコアとなる問題群を抽出するなど、問題の整理を行う。また、コアの問題に取り組むためのレディネスを測る問題についての検討を行い、それらを基に、基礎学力の定着度を測定するためのテスト問題の開発を行う。

また、S-P表(Student-Problem score table・問題分析枠組みのこと)による分析を通して、テスト問題の改善や生徒の指導内容や方法の改善につなげる。同時に、通過率100%を目標とする各教科のコアとなる問題や、100%が目標ではないが各教科のコアとなる問題など、通過

率を検討・設定することで、指導方法の改善の検証を可能とする。こうして測定された定着度の授業改善への活用では、「SML」（仮称・榛生昇陽朝の学び・モジュール学習）と名付けた10分程度の朝のモジュール学習に反映させ、生徒の基礎学力の向上を図る。また、測定結果は、個別指導にも活用し、特に、中学校での学習内容について、理解が不十分な生徒に対しては、個別にこれまでの学習を補う学習（「高校版リメディアル教育」）を実施するなど個別指導の充実を図る。

このほか、滋賀県立玉川高校では、PDCASサイクルを「改善を図る組織文化」として捉え、教員一人ひとりの課題意識を形成するためのものと位置付けて「C/A/P/D」と「P/D/C/A」につながるものに整理して、効果的に組み合わせ研究するという。また、大阪府教育センター附属高校では、思考力を育むアクティブ・ラーニングを意識したカリキュラムの充実や、パフォーマンス課題をカリキュラムに適切に位置付ける「逆向き設計」論の活用などをさらに進めていく。

特別企画

高校生の基礎学力定着のための研究のポイントは？

文部科学省では、高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業を実施しているが、このほど平成30年度の採択事業が公表され、全国で16教委が調査研究を行うこととなった。「高校生のための学びの基礎診断」導入や学習改善のためのPDCASサイクルなどのカリキュラム・マネジメントの在り方などが主なテーマ。実践研究校での主な傾向を探った。

実践研究校では、高校生の基礎学力定着のために、「学び直し」やアクティブ・ラーニング、ICTの活用などが共通するキーワードとして出てくる。

「学び直し」の独自教材も

高校生の基礎学力の定着のために、中学校までで学んだ内容の「学び直し」等をキーワードとした調査研究に取り組む例では、石川県立松任高校がある。これまで開発してきた「学び直し教材」などを活用するとともに、ICT機器の活用やペア・グループ学習などによるアクティブ・ラーニングを実践し、生徒の主体的・

協働的な学びとなるような授業改善を行う。また、学校での学習活動と連動して、家庭学習を習慣化する仕組みを構築するためのプロジェクトを立ち上げ、生徒の生活習慣の改善に取り組む。校内の取組については、外部有識者で組織する調査研究事業検討会議からの指導・助言を仰ぐとともに、地域の小中学校と、基礎学力定着に向けた連携・研究を行う「基礎学力はくさん」を設置し、地域ぐるみの指導体制を構築していく。特に、小・中学校が行っている全国学力・学習状況調査の分析や授業へのフィードバックを参考に、生徒の学力向上に向けたPDCASサイクルの確立を目指す。加えて、実践研究を通して得られる知見から、基礎学力を測定するための評価問題の研究も進める。

島根県立出雲農林高校でも、学び直し教材の活用と独自教材の開発や資格取得による基礎学力の充実に取り組んでいく。具体的には、①学び直し教材の活用と独自教材の開発（学校設定科目「サイエンスアプローチ」を1年から3年まで週1単位設定し、授業の中で中学校段階の学

び直しの効果的な方法の研究と独自教材の開発)②ICTを活用した「スパイラル学習」の構築（ICT機器を効果的に活用することにより、講義形式の授業から脱却し、生徒参加型のアクティブ・ラーニングを目指す。また、授業と実習・家庭学習と有機的に関連させるとともに、ICT機器を活用した自主学習に取り組ませる方策を研究)③資格取得による基礎学力の充実（漢検・英検の全員受験、数検の希望者受験により国・英・数の基礎学力の充実を図るとともに、農業関連の各種資格試験を通して、専門分野の基礎学力の向上を図る)④専門分野と基礎学力養成分野のスパイラルによる学習意欲の向上（課題研究におけるプロジェクト学習を充実させることにより、基礎的な知識・技能の重要性を認識させるとともに、「サイエンスアプローチ」の授業で、プロジェクト学習に必要なデータ収集や分析方法、プレゼンなどの技能を習得)など。

福岡県立朝倉東高校では、必修科目「国語総合」「数学Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅰ」等の基礎学力を高める土台として、義務教育段階